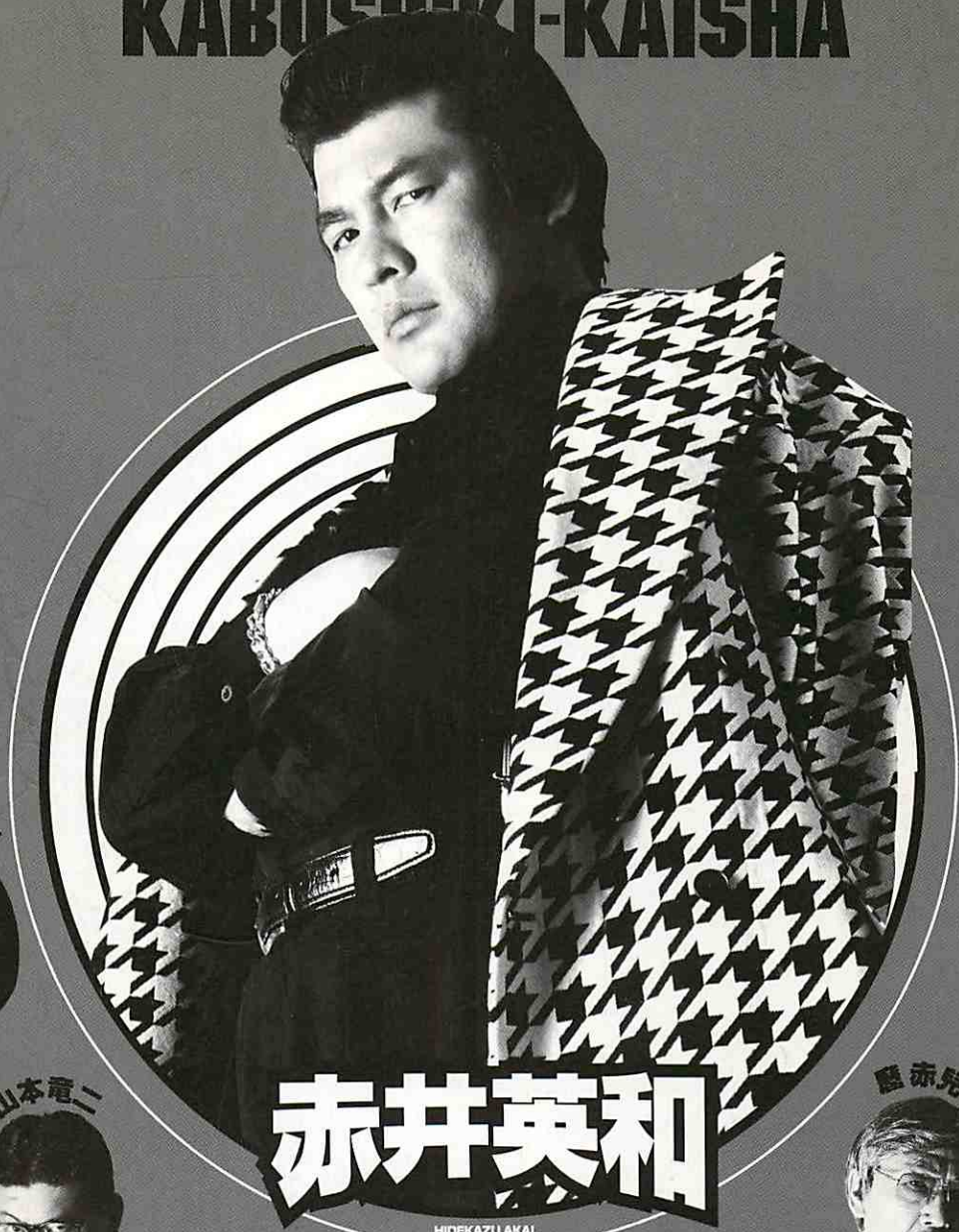


SHIN-KARAJISHI

KABUSHIKI-KAISHA

男の生きざま見せたるねん。



つみきみほ



秋島敏行



山本竜二



藤赤児



赤井英和

HIDEKAZU AKAI

赤井英和主演 前田陽一監督作品

新唐獅子株式会社

CAST: 赤井英和 / つみきみほ / 山本竜二 / 菅田俊 / 柳原真由 / 三原麻衣子 / 小林十之七 / 藤赤児 / 室田日出男 / 水島敏行 STAFF: 製作 山崎隆夫 企画 岡田裕 原作 小林信彦 (新潮文庫・刊) プロデューサー 千原しのぶ / 加谷隆広 / 伊藤直克 脚本 前田陽一 / 北里宇一郎 撮影 満井坦彦 照明 小中健二郎 録音 土屋和之 美術 山崎隆夫 音楽 尾形真一郎 編集 菊池地一 制作担当 等須政光 協力監督 南都英夫 / 長瀬英高 監製 前田陽一 製作 GAGA PICTURES 制作協力 アルゴ・ピクチャーズ 配給 GAGA (株) エキス・コミュニケーションズ 配給協力 ゼアリス エンタープライズ 宣伝 アルゴ・ピクチャーズ 1998年 日本作品 / カラー / 91分 / ビスタサイズ / 6巻 ©1998 GAGA PRODUCTIONS

昔かたぎのやくざ・黒田哲夫が6年ぶりにシャバに戻ってみると、バブル崩壊後の社会はすっかり様変わり。古巣の組も暴対法の施行によって共存共栄の平和外交路線に転換し、手広く事業を手掛けていた。黒田は須磨の大親分から組の経営するケーブルテレビ局の局長に任命される。慣れない仕事も軌道に乗りにかけた頃、正体不明の人物から局に「やくざ狩り」のゲームを開始する予告電話が入った。その言葉どおり、須磨組の組員達は何者かに次々と狙撃されていくが……。

監督

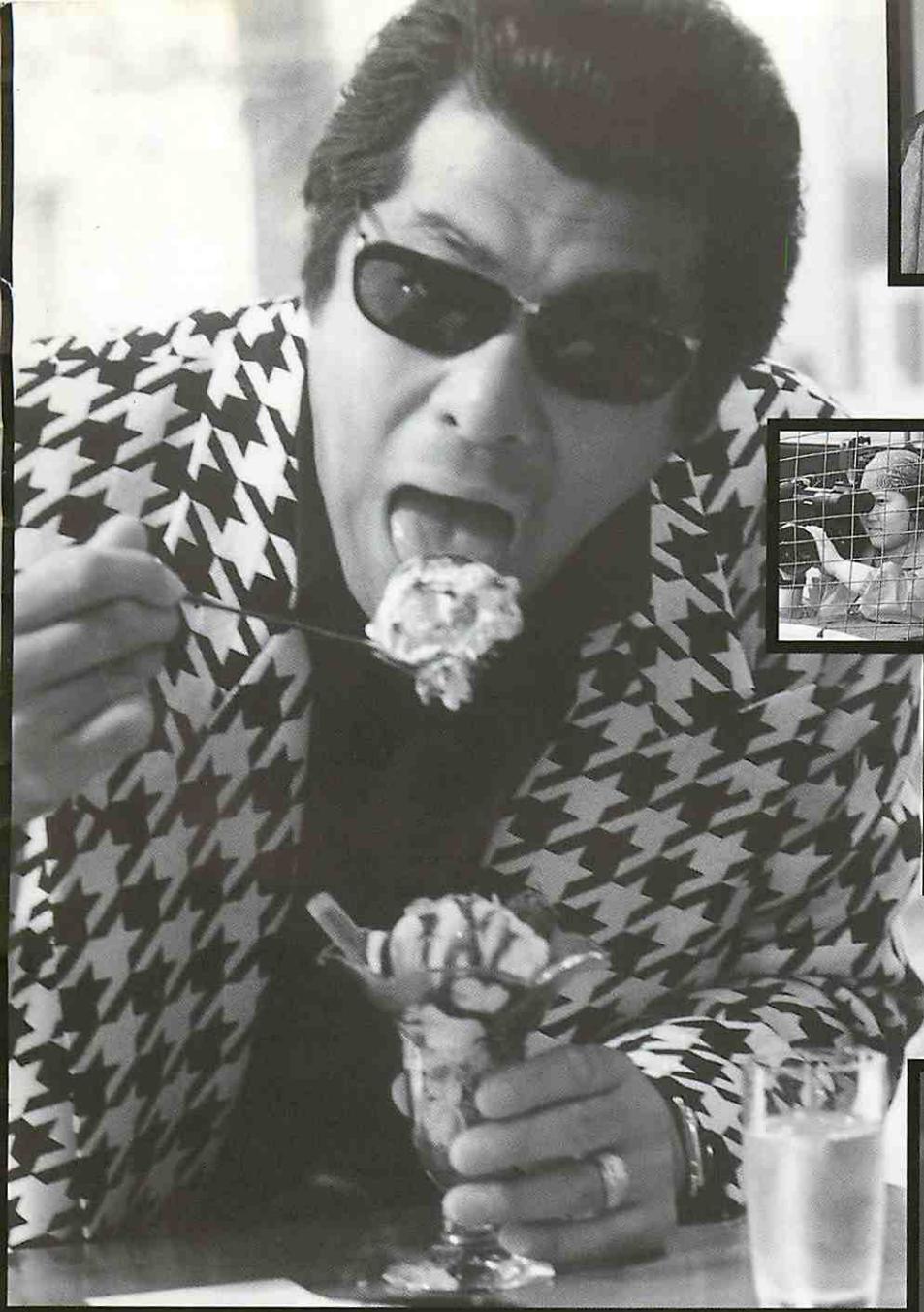
前田陽一

文芸映画を撮らないことが、私のプライド。

原作

小林信彦

前田陽一監督は、命とひきかえに、この映画を作りました。どうしても、この原作で、という執念があったのです。



6年の刑期を終えて出所した二階堂組・黒田哲夫(赤井英和)は、坂津の街に戻ってきたが、バブル崩壊後のシャバはすっかり様変わりしていた。組事務所を訪れると、組員は全員ネクタイにスーツのサラリーマン・スタイルになっている。暴対法の施行後、組は共存共栄の平和外交に路線転換。新しもの好きの大親分・須磨(室田日出男)によってニカイドー・エンタープライズと名を改め、組長の二階堂(磨赤児)は社長、若頭の江崎(菅田俊)は専務と呼ばれ、昔の武闘派ややくざだった頃の名残は影も形もない。組では多角経営に乗り出してケーブルテレビも運営しており、商店街の安売り情報や地域密着のニュース、地元最大の娯楽である坂津競馬の中継など数々の番組を中継していた。主婦向けの情報番組では、なんと黒田の弟分のダーク荒巻(山本竜二)がキャスターを務めていた。黒田は二階堂に命じられて局長に就任することになり、わけもわからず四苦八苦しながらも真面目に働き始める。どんなことにもバワフルに向かっていく黒田に真の男を見つけた局の女性ディレクター・蘭子(つみきみほ)は、彼に好意を寄せる。

そんな折り、事件が起きた。正体不明の人物から「やくざ狩り」のゲームを宣言する電話が生放送中の局に寄せられ、その予告どおりに組員たちが何者かによって次々と狙撃されていった。二階堂組に恨みを持つ者の犯行だろうか?犯人探しを進めるうちに、黒田と蘭子の気持ちは深まっていく。容疑者として浮上したのは、小さなバーを経営する宮島(永島敏行)という男。しかし、黒田にはこの男が犯人とは思えず、親近感を感じてしまう。実は宮島は、かつて高校野球の甲子園大会で活躍し、プロ入り後は黒田も憧れた選手だった。将来を渴望された宮島だったが、たった一度の過ちで八百長事件に加担したのちに、球界永久追放されたのだった。やくざ社会のしがらみから逃れられず、中学の後輩を殺した過去を持つ黒田は、宮島に自分と同じものを見る。互いに取り返しのつかない心の傷を抱えて生きていく意思と覚悟を持つ二人は、次第に奇妙な友情と連帯感で結びつく。黒田は宮島が犯人だと思込む二階堂の命令を蹴って、蘭子の協力を得て真犯人を捜そうとする。

やがて犯人から二階堂射殺予告の電話が入った。怯える二階堂だが、須磨の命令でケーブルテレビ局が地下にある坂津球場で犯人の挑戦を受けることになった。警察が監視する中、約束の時間は刻々と迫る。球場で待つ黒田の前に、一人の制服警官が駆け出して二階堂の命を狙った。宮島はとっさにボールを投げ、黒田が男を取り押さえた。この男が一連の犯行の真犯人だったのだ。だが、二階堂は既に何者かが放った別の銃弾で殺されていた。須磨は黒田を呼び出し、二階堂の跡目を継ぐよう命じる。二階堂を殺したのは須磨の放ったヒットマンだった。蘭子は東京のテレビ局に行くことになり、そして黒田と宮島はまた、それぞれの日常に戻っていくのだった。

PROFILE

(プロフィール)

赤井英和

HIDEKAZU AKAI ■1959年8月17日、大阪府生まれ。プロボクサーとして

12連続KOの日本記録を樹立し、「浪花のロッキー」として親しまれるが、試合中に生死をさまよう重傷を負って引退。その後、芸能界に転じ、自らの自伝を基にした映画『どついたるねん』(89年)で俳優デビュー。以降、『王手』(91年)『私を抱いてキスして』(92年)『119』(94年)などの映画、『奇跡のロマンス』(97年)『略奪愛・アブない女』(98年)などのテレビドラマ、『石川五右衛門』(98年)などの舞台、バラエティ番組、CMにと幅広く活躍。



つみきみほ

MIHO TSUMIKI ■1971年4月13日、千葉県生まれ。オーディションで選ばれ、『テイク・イント・イージー』(86年)で映画デビュー。以後、『精霊のささやき』(87年)『花のあすか組』(88年)『べっぴんの町』(89年)『櫻の園』(90年)『新・同様時代』TVO『MISTY』(91年)などで、個性派女優としてキャリアを重ねる。本作品が出演後初の映画出演となる。

磨赤児

AKAJI MARO ■1943年2月23日、奈良県生まれ。大船舵船を主宰。本公演のほか、映画、舞台、テレビ、CMにと活躍。主な映画主演作に、『どついたるねん』(89年)『夢二』(91年)『王手』(92年)『月はどっちに出ている』(93年)『午後の遺言状』(95年)『ちんねえ』(97年)『アンラッキーモンキー』(98年)『ホルノスター』(98年)など。

菅田俊

SHUN SUGATA ■1955年2月17日、山梨県生まれ。劇団状況劇場出身。映画、TV、CM、ビデオとハードな役からコミカルな役までオールラウンドなプレイヤーとして活躍。最近では、黒沢清、小松隆志ら、若手監督とのコラボレーション多し。最近作『蜘蛛の囃し』『チャカ』(共に98年)。

山本竜二

RYUJI YAMAMOTO ■1958年8月19日、京都府生まれ。父が殺陣師、祖父が大映京都の制作主任、そして叔父があつた嵐寛寿郎というカツドウ屋一家に生まれ育つ。高校時代より数多くの時代劇に出演後、上京して本格的に俳優活動を開始。現在は成人映画から一般映画、テレビまで幅広く出演している。主な映画出演作に、『どついたるねん』(89年)『病は気から 病院へいこう2』(92年)『新・悲しきヒットマン』(95年)『鬼火』(97年)など。

室田日出男

HIDEO MUROTA ■1937年10月7日、北海道生まれ。'57年、東映第4期ニューフェイスに合格し、俳優の道へ。同年、『台風息子 修学旅行の巻』で映画デビュー後、数多くの映画、テレビドラマに出演。個性派俳優として揺るぎない地位を築く。主な映画出演作に、『狼と豚と人間』(64年)『脅迫』(66年)『組織暴力』(67年)『資金源強奪』(75年)『人妻集団暴行致死事件』(78年)『影武者』(80年)『野獣死すべし』(80年)『魔界転生』(81年)『九月の冗談クラブバンド』(82年)『ドグラ・マグラ』(88年)『死んでもいい』(92年)『エンドレス・ワルツ』(95年)など多数。

永島敏行

TOSHIYUKI NAGASHIMA ■1956年10月21日、千葉県生まれ。'77年、オーディションで選ばれて、映画『ドカベン』でデビュー。『サード』『事件』『輝らざる日々』(78年)での演技が高く評価され、各種映画賞の新人賞を総ナメにした。以後、映画、テレビ、舞台に活躍。主な映画主演作に、『英霊たちの応援歌 最後の早慶戦』(79年)『遠雷』(81年)『地平線』(83年)『喘む女』『異人たちの夏』(88年)『MISTY』(91年)『夢の女』(93年)『夜がまた来る』『午後の遺言状』(94年)『ひめゆりの壺』『GONIN』『三たびの海峡』(95年)『カメラ2 レギオン襲来』『GONIN 2』(96年)『タオの月』(97年)など。



主演

赤井英和

酒飲んで熱く語り合ったのに…。
命かけた作品は立派に前田作品になった。
天国で「ようやってくれた」言うてくれると思います。

INTRODUCTION

(解説)

関西の架空の街・坂津を舞台に、須磨組の奇妙なやくざたちが狂騒的な騒動を繰り広げる小林信彦の連作短編小説『唐獅子株式会社』は、その破天荒な発想と奔放なギャグ、映画的なシチュエーションなどがクリエイターたちの創作意欲を刺激し、原作の発表以来、岡本喜八、長谷川和彦ら多くの監督たちが映画化に名乗りを上げた。当時松竹に在籍していた前田陽一監督も映画化を企画していたが、結局実現しなかった。前田監督は小林信彦が中原弓彦名義で共同脚本を手掛けた『進め!ジャガーズ 敵前上陸』(68年)で組んでいる旧知の仲だった。

■ プログラム・ピクチュアのアルチザン、前田陽一

ストレートよりもシュート。ウェットな悲しみを隠したドライなユーモア。反骨精神とセンチメンタリズムが狂騒的な物語の中に同居する作風が観る者を魅了してやまない前田陽一監督は、デビュー作「にっぽんぼらだいたす」(64年)以来、数々の作品を発表し、「半マジメ精神」で人間の真実の営みを追求し続けた映画作家。最近ではマニアのみならず、ビートルズ映画やゴダールの『気狂いピエロ』のバロディも飛び出すカルト・コメディ『進め!ジャガーズ 敵前上陸』(68年)、チネ・ジャズ風の音楽がカッコいい”和製『黄金の七人』”こと『七つの顔の女』(69年)などで、新しい世代のファンにも注目されている。

■ 急逝した監督の遺志を継ぎ、映画は完成した

'83年に横山やすし主演、曾根中生監督によって映画化された『唐獅子株式会社』が興行的にも内容的にも不振に終わったのち、再映画化の企画が多数上がったが、小林信彦の許可を得るものはなかった。前田監督も長く企画を温めており、'97年になって脚本を練り上げて提出したところ、原作者の快諾を得て再映画化の企画がスタート。11年ぶりの劇場用映画となる『新・唐獅子株式会社』が実現した前田監督の意気込みと喜びは大きかったが、既にこのとき、監督の体は病魔に蝕まれていた。病身をおして連日現場に臨み、順調に撮影を進めていたが、5月2日の撮影終了後、身体の不調を訴えて緊急入院。スタッフやキャストに動揺を与えまいと、しっかりと足取りで現場から車に乗り込む心遣いを見せながら、「明日は現場に行く」と、最後まで撮影の心配をしていたが、その夜、容体が急変し、明け方に逝去。病魔と闘いながら撮影に臨んだ前田監督のカツドウ屋魂に込めるべく、残り4割の撮影を続行することが決定。前田組の助監督を10年以上務め数本の共同脚本もある南部英夫監督が名乗りを挙げ、今作のチーフ助監督である長濱英高と共同で演出と仕上げを引き継ぎ、ここに『新・唐獅子株式会社』は完成した。

■ ときに笑わせ、ときにせつなく……。これは26本目の前田映画の最新作だ

「喜劇的想像力」を駆使した小林信彦の原作は、小説という形式ならではのもので、そのままでは映画化は困難だ。『よいお年を』(97年)などのドキュメンタリー映画やPR映画の分野で活躍し、これが初の劇映画となるシナリオライター・北里宇一郎と前田監督は脚色にあたって、原作のキャラクターやムードを借りてオリジナルのプロットを創作。'83年版と異なり、原作に忠実に黒田哲夫を主人公に据えた。6年ぶりにシャバに戻った黒田の浦島太郎ぶり、やくざが経営するケーブルテレビといった「ツカミ」で笑わせる一方、メディアを利用した犯行というアイデアは海外のウェルメイドなエンターテインメント作品を思わせる。さらに、過去に心に傷を負った者同士である黒田と宮島の奇妙な友情を描いたセンチメンタリズムは、前田作品ならではの「文芸映画を撮らないことが私のプライド」と言っていた監督だけに、『新・唐獅子株式会社』は命を賭して作った遺作というより、プログラム・ピクチュアのアルチザンが作った26本目の最新作という方がふさわしい。

■ 豪華かつ異色のキャスト

主役の黒田哲夫に扮するのは、映画、テレビドラマ、CM、舞台とマルチに活躍し、映画主演は『119』(94年)以来4年ぶりとなる赤井英和。共演はヒロインの蘭子に『櫻の園』(90年)のつみきみほ、物語のキー・パーソンとなる人物・宮島に『タオの月』(97年)の永島敏行、二階堂組の若頭・江崎に『ニンゲン合格』(98年)の菅田俊、黒田の所属する二階堂組組長に『ホルノスター』(98年)の磨赤兒、お調子者のやくざ・ダーク荒巻に『トカレフ』(94年)の山本竜二、そして須磨の大親分に『死んでもいい』(92年)の室田日出男と、若手からベテランまで異色の顔ぶれが顔を揃えている。

■『新・唐獅子株式会社』と前田陽一の軌跡 佐藤利明(娯楽映画研究)

前田陽一監督は、松竹をホームグラウンドにしてデビュー作『につぼんばらだす』(64年)から、一貫してコメディを作り続けてきたために、喜劇作家であるというイメージが強い。松竹大船撮影所出身でありながら、山田洋次に代表されるような正統派ではなく、むしろ渋谷実、川島雄三、吉田喜重といった異端の作家の系譜に属している。渋谷実に師事し、吉田喜重の助監督として脚本も書いていた。風俗喜劇とヌーヴェルヴァーグが奇妙に同居しているのが前田映画の世界でもあり、熱狂的なファンも多い。その前田陽一の『Let's 豪徳寺』(87年)くらい、11年ぶりの劇場用最新作がこの『新・唐獅子株式会社』だ。

原作『唐獅子株式会社』は、70年代後半に一大ブームを起こした小林信彦のベストセラー小説。実は、東映で83年に曾根中生監督によって映画化される前に、前田陽一が映画化を企画してシナリオまで完成していた。しかし、ヤクザが主役の映画は当時の松竹では成立は難しく、製作直前になって断念。そういう経緯もあって監督が永らく暖めていた企画だったが、前田と北里宇一郎による脚本は、原作のムードを大切にしつつオリジナルの『唐獅子ケーブルテレビ』の物語を展開している。不死身の哲こと黒田哲夫、原田、ダーク新巻、そして須磨組大親分・須磨義輝といった、原作の読者には馴染みの面々が繰り広げる騒動という点では、小林信彦世界を継承している。

前田陽一と小林信彦の付き合いは古く、前田は小林信彦(当時は中原弓彦)との共同脚本でGS映画『進め!ジャガーズ 敵前上陸』(68年・松竹)を監督している。今やカルト映画となったその作品の中で、小林のパロディ感覚と前田の戯作精神が見事に融合していた。そして今回は小林信彦の世界を前田陽一が映画化する。ファンとしての期待はいやがおうにも高まる。

さて『新・唐獅子株式会社』は、『坂津ケーブルテレビ』や『劇場型犯罪』など、小林信彦好みのモチーフを盛り込みつつ、前田陽一映画ならではの仕掛けがなされている。原作の基本パターンである『ヤクザがケーブル・テレビを運営する』というプロット自体が、不真面目と真面目が同居する前田陽一らしいといえるだろうが、宮島(永島敏行)というキャラクターは前田陽一のオリジナルだ。酒の飲めない黒田(赤井英和)が『坂津ケーブルテレビ』の勧誘のために訪れた、スナック『レッド・ダスト』の寡黙なマスター宮島に奇妙なシンパシーを感じる黒田。二人の間に生まれる不思議な連帯感と友情。そして互いの過去が明らかになるラスト・シーン。『新・唐獅子株式会社』が真正正銘の前田映画であると感じるのは、この黒田と宮島の奇妙な友情の部分であり、この二人は前田陽一の分身といってもいいだろう。

乱暴な言い方をすれば、喜劇とタイトルに付けば『どんな作品の企画でも通った』という松竹映画時代、前田陽一のターニング・ポイントとなった『喜劇・あゝ軍歌』という70年の作品がある。フランキー堺と財津一郎が、戦後詐欺まがいのことをして生き抜いている。そんな彼らが、敵前逃亡の汚名を着せられて戦死した仲間のために、ささやかな復讐をする物語だった。もちろん主人公たちのドタバタぶりが描かれる喜劇なのだが、前田監督は不思議な友情で結ばれたフランキーと財津のコンビの過去が浮き彫りになるプロセスを、センチメンタルかつ感動的に描写。以後、フランキーと財津のコンビによる、戦中派の心情をしみじみ描いた『喜劇・命のお値段』(71年)などを連作している。これらは一見、喜劇なのだが、その芯は主人公たちが『過去の自分』と向き合う『自分探し』の物語でもあった。そのテーマをロード・ムービーとして昇華させたのが代表作『神様のくれた赤ん坊』(79年)だろう。桃井かおりの母親が娼婦だったという衝撃的な事実が判明するクライマックスに向けて、桃井と渡瀬恒彦は、子連れれの奇妙な旅を続ける。喜劇のスタイルをとりながらも、前田作品には『過去の自分と対面する主人公』と、その『アイデンティティの回復』というテーマが内包されている。

もちろん『新・唐獅子株式会社』は、ヤクザ映画のパロディやミステリーといった要素を折り込んでのエンターテインメント映画となっている。しかしここでも、前田陽一は黒田哲夫の『後戻り出来ない過去』への思いを描いている。たった一度の過ちで、昔の自分に戻れなくなってしまった黒田は、やはり『後戻り出来ない過去』を持つ宮島に自分を見いだして、奇妙な友情を抱く。黒田の分身である宮島を登場させることによって、前田監督は自分自身と向き合おうとしたのではないだろうか。残念ながら前田監督は、本作のクランクアップを見届けることなく撮影中に急逝してしまった。しかし『新・唐獅子株式会社』には、紛れもなく映画作家・前田陽一作品の味わいが色濃く残されている。ファンとしては非常に喜ばしいことである。

原作:小林信彦

■1932年12月12日、東京生まれ。早稲田大学文学部英文学卒業後、『ヒッチコック・マガジン』編集長を務め、同時に映画評論も始める。その後、専業作家となり、純文学からエンターテインメントまで、幅広い作風で熱狂的なファンを獲得。『唐獅子株式会社』『超人探偵』『悪魔の回廊』『ビートルズの優しい夜』『ちはやぶる奥の細道』『ぼくたちの好きな戦争』『世界でいちばん怖い島』『怪物がめぐる夜』『イーストサイド・ワルツ』『結婚恐怖』『私説東京繁盛記』など著書多数。『日本の喜劇人』『世界の喜劇人』『映画を夢みて』『コラムは踊る』『コラムは笑う』『コラムにご用心』など、映画に関連する著書も多い。これまで映画化された作品は『九ちゃんのでっかい夢』(67、三木洋名義)、『唐獅子株式会社』(83)、『紳士同盟』(86)、『悲しい色やねん』(88)があり、前田陽一監督の『進め!ジャガーズ 敵前上陸』(68)では、中原弓彦名義で共同脚本を執筆

監督:前田陽一

■1934年12月14日、兵庫県生まれ。早稲田大学文学部卒業後、松竹大船撮影所に入社。大島渚、吉田喜重、渋谷実らに助監督として就く。64年、『につぼんばらだす』で監督デビュー。以後、喜劇を中心に娯楽映画ひと筋。日本映画の中でもきわめてユニークな位置を占め、熱狂的なファンを獲得する。痛と闘いながら取り組んだ11年ぶりの劇場用映画『新・唐獅子株式会社』の撮影中に倒れ、97年5月2日、不帰の人となる。
■フィルモグラフィ(劇映画のみ):『につぼんばらだす』(64)『涙にさよならを』(65)『ちんころ海女っ子』(65)『スチャラカ社員』(66)『濡れた違いぎ』(67)『進め!ジャガーズ 敵前上陸』(68)『七つの顔の女』(69)『喜劇・あゝ軍歌』『喜劇・冠婚葬祭入門』『喜劇・右向け左』(70)『喜劇・猪突猛進せよ!』『喜劇・昨日の敵は今日も敵』『喜劇・命のお値段』(71)『喜劇・男の子守唄』『虹をわたって』(72)『喜劇・日本列島無敵0』(73)『三億円をつかまえる』(75)『喜劇・大誘拐』(76)『坊ちゃん』(77)『神様のくれた赤ん坊』(79)『土佐の一木釣』(80)『次郎長青春編 つっぱり清水港』(82)『喜劇・家族同盟』(83)『Let's 豪徳寺』(87)『新・唐獅子株式会社』(98)

協力監督:南部英夫

■1939年9月7日、福井県生まれ。早稲田大学法学部を卒業後、松竹大船撮影所に入社。助監督として主に前田陽一、山根成之に就く。とりわけ前田監督とは『神様のくれた赤ん坊』などで脚本にも参加し、作品作りのよきパートナーとなる。76年、『愛と涙・完結編』で監督デビュー。88年にフリーとなってからは、テレビドラマやオリジナルビデオで活躍。

協力監督:長濱英高

■1964年7月2日、東京生まれ。横浜放送専門学校(現・日本映画学校)を卒業後、フリーの助監督に。前田陽一、山根成之、南部英夫、長尾司などに師事する。監督作品に『もうDEBEなんて言わせない!』『かつ鷹五郎』(97)がある。

STAFF

原作■小林信彦(新潮社刊) 企画■山地浩/岡田裕 プロデューサー■千葉喜紀/細谷隆広/伊藤直克 脚本■前田陽一/北里宇一郎
撮影■満井担彦 照明■小中健二郎 録音■土屋和之 美術■山崎輝 音楽■尾形真一郎 編集■菊地純一 スクリプター■宮下こずる
制作担当■鷺頭政充 協力監督■南部英夫/長清英高 監督■前田陽一

CAST

黒田哲夫…赤井英和 荒川蘭子…つみきみほ ダーク荒巻…山本竜二 江崎…菅田俊 原田…榊原直哉 明日香…三原麻衣子 ヤスオ…内田岳志
ミノル…荒川賢一 権藤…星野晃 関口…小林すすむ レッドダストの客…橘雪子 出張ソープの女…西田ももこ 二階堂…唐赤兒
須磨義輝…室田日出男 宮島…永島敏行